

大学名 熊本大学

第61号テーマ
「レジリエント社会の構築に向けて」

表題 住民と自治体の橋渡し役として携わる地域の復興



ましきラボWEBサイト

<https://cwmd.kumamoto-u.ac.jp/mashikilab/>

熊本は、2016年4月に起きた熊本地震により、大きな被害を受けました。熊本大学は、地域に根ざした国立大学として、これまで集積してきた研究成果や教育研究資源を活用し、熊本の復興に貢献することを目的に、「熊本復興支援プロジェクト」を立ち上げました。そのプロジェクトの一環として誕生したのが「ましきラボ」です。

「ましきラボ」は、熊本地震から半年後の2016年10月、甚大な被害を受けた益城町の復興を目指し、益城町秋津川河川公園に開設され、復興の現場で本学の専門家や学生が住民と対話しながら地域の将来像を描き、都市計画や復興まちづくりを行うための支援を行っています。住宅や道路の再

建、地域コミュニティに関する相談、町の将来像についてなど、住民や自治体から寄せられる幅広い相談に対して、熊本大学の専門家やまちづくり・都市計画を学ぶ学生らがアドバイス・提案を行い、復興に向けて町と一体となって取り組んでいます。

地震からの復興に向けてレジリエントなまちづくり自体へ貢献することはもちろんですが、大学と自治体・地域住民とのパートナーシップが深まっていることも実感しています。熊本地震からの復興という大きな目標に対し、自治体や地域住民、大学が同じ方向性を持って取組を進めていくことで、お互いの距離が近づいたと感じています。また、地域の課題を解決するために、「ましきラボ」を通じて様々な活動・意見交換を行うことで、自治体や地域住民に主体性が高まり、現在は自治体の若い職員が中心となって町の賑わいを創出する取り組みが動き始めているほか、まちづくり協議会や自主防災組織が多数立ち上がるなど、地域を引っ張る新たなリーダーが生まれています。

さらに、「ましきラボ」での活動は、本学の学生にとっても貴重な学びの場となっています。まちづくりや都市計画、建築、土木などを専攻する学生が、被災地に何度も足を運んでフィールドワークを行い、自分たちなりの提案をまとめて地域住民等の前で発表を行うことで、実際の事業に関わることの難しさややりがいをも身をもって学ぶことができます。このような経験によって成長した意欲溢れる学生は、将来各分野で経験を活かし、活躍してくれるものと確信しています。



地域住民が教員や学生と意見交換を行うオープンラボの様子



現地調査をもとに演習課題に取り組む学生たちの様子



地域住民に対して研究発表・活動報告を行う学生たちの様子